
Future Flag

活字の錬金術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Future Flag

【Nコード】

N3640BA

【作者名】

活字の錬金術師

【あらすじ】

死亡フラグ、生存フラグ、恋愛フラグ、勝利フラグ、敗北フラグ、再会フラグ。

この世界には、多くのフラグがある。

そして、そのフラグが立てば、必ずその展開になる世界がある。その世界では、人々がフラグを用いて争っていた。

ブローグ〜スレッド〜(前書き)

漫画にしてない小説です、完全オリジナルです。長編になると思いますが、しばしおつきあい下さい

プロローグ〜スレッド〜

死亡フラグ、生存フラグ、恋愛フラグ、勝利フラグ、敗北フラグ、再会フラグ。

この世界には、多くのフラグがある。

そして、そのフラグが立てば、必ずその展開になる世界がある。その世界では、人々がフラグを用いて争っていた。

—————プロローグ〜スレッド—————
—————

1 名前：名有りさん「sage」 投稿日：2061/6/7（

火） 11:57:25.44 ID：HGNNXLB3B0

「私は、未来から来ました。

これから、私の大予言が始まります。

じき、日本は海に沈みます。

日本人の多くは中国に避難するでしょう。」

3 名前：名無しさん「sage」 投稿日：2061/6/7（

火） 11:58:45.43 ID：SBDMWS3N0

<<1

はいはい、ワロスワロス

5 名前：名無しさん「sage」 投稿日：2061/6/7（

火） 11:59:15.11 ID：APMAWb63S1

<<1何の経緯があつてそんなことが言えるんだよwww

火) 12:08:21.51 ID:SBnij15E
賛成wwww キタ (。() ツ!!

18名前:名無しさん「sage」 投稿日:2061/6/7
火) 12:09:22.52 ID:RMs*「575E
キタ (。() ツ!!

「荒れちゃった・・・みんな信じてくれないな・・・どうしてだろ
う・・・」
「前の世界ではキモヲタ達は信じてくれたのに」

第1話 無駄そうで無駄じゃないさそうな無駄なヲタクの会話(前書き)

この話2ちゃんねらーじゃないとわからない言葉が大量に出てくる。
・・・かも？

嫁・・・

俺の嫁とは、妻帯している男性が自分の配偶者を指す呼称の一つである。

これが転じてネット上やヲタクの間では「お気に入り二次元キャラ」に対して使われるのだ。

現実世界で使うと痛い目で見られるので注意しなければいけないぞ！

・・・だ！

理解してもらえたか！その嫁の同人誌を俺達は買いに来たのだ。

ちなみに俺の嫁は、トレイン美少女マジカル優子！の主人公の優子ちゃんだ！！

そしてあの輩、楓は嫁が300人以上いる、いわゆる・・・外道だ。

日本では一夫一婦制が浸透しているため、複数のキャラに「俺の嫁」とコメントするのはタブーとされている。本来は好きなキャラ1人だけに使うのが望ましい。ただし、複数の嫁を公言する外道もいる。

8

その外道・・・それが楓だ。

「今日はどの嫁狙いだ？」

「うん・・・最近始まった臨界点ブルブルスのヒロイン 由子ちゃんだな」

「何！？お前また新アニメに嫁を作ったのか！？しかも由子ちゃんだと・・・優子ちゃんと被るじゃねえか！」

「絶対見てやんねーよ、臨界点ブルブルスなんか！」

俺は由子と優子ちゃんが被ると思ったから、

すこし・・・すこしだけ・・・いや・・・すこしかな・・・すこしい・・・

すごいキレた！

「おまつ・・・！ブルブル面白いらな！！ふざけんなよ！見るよ！ブルブルするほどおもしろーんだぞ！」

「いやだ！優子ちゃんと被るー！」

「そうか・・・お前の優子への愛はそれほどまでか・・・」
「何！？」

「お前は由子と優子が被ると言ったな・・・それはつまり、優子と由子が似てると思ってるっていうことだな。」

「・・・そうだが」

「おまえにとつて『う』の存在価値は、それほどまでに低いのか！！！」

「優子と由子がにってるだど・・・どこが似てるって言うんだ！？」

「普通の一般人にしてみれば、かなり似てると思うよ・・・しかしな！！！！優と由では！！！！夏コミと春コミくらいちがうんだぞおお！！！！！！！！」

ビシビシ！！！！？！！？！！

俺の全身に黄色く光り輝く稲妻が走った。

そして・・・俺の心は燃え尽きた

「・・・そうだな・・・負けたよ・・・外道・・・」

「お前はたしかに嫁がいつぱいいるな、でもお前は・・・一人一人の嫁の大切さを分っていた・・・」

「俺は・・・自分がよく知っている優子ちゃんと・・・自分が全く知らない由子・・・ちゃんを被るなどと言ってしまった・・・この件は・・・俺が悪い・・・これはVIP板で公開処刑しなければいけないほどひどいことだ・・・」

「VIP板で・・・叩かれてくる・・・」

!!!

ただそれだけなのだ。

そこまで早く売り切れないって？

そんなはずはあるか！！俺達は自分の嫁の人気を信じている・・・
つまりそう言うことだ

みんなに察してもらいたい。

そう言う事なのだ。

嫁の人気ははかりしれない！！！！！！

俺達は！！！！ただだ・・・嫁の可能性を信じたい！！！！！！！！！！
！！

「アッー！」

いきなり周りからそう声が聞こえた。

ただの、物を落としたり、アクセントが起きたときの「あーー

！」という声なのかもしれないと普通の人なら思うだろう

だが、俺達は違う。

聞き取れたのだ・・・

(今の声は・・・確かに・・・)

「悟・・・」

「楓・・・」

俺は抱き合っている体を離した。(まだ抱き合っていたのだ)

俺と楓は同時に同じ事を想像した。

そして同時に同じ言葉を発した

「ホイホイチャーハン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

(ガチムチにいさんだった。)

第1話 無駄そうで無駄じゃなさそうな無駄なヲタクの会話（後書き）

この話について行くためには・・・

片タブにグーグル先生を開いて、

分からない言葉があつたらグーグル先生に聞こう！

第2話 今生きてる俺達って、昔のヤツからすれば未来人なんだよな。

(前書き

結構ギャグ回だったりして・・・

第2話 今生きてる俺達って、昔のヤツからすれば未来人なんだよな。

「ホイホイチャーハン!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

俺達はそう叫んだ

俺達は兄貴の声が聞こえたのだ。

あの独特の「アツー！」は絶対にあの人だ!!

「森の妖精兄貴・・・まさかこんな所で会えるとはな・・・」

「あつにきいいいいいいいいいいいいいいいいいい!!!!!!」

俺はそう言い 人混みを掻き分け兄貴を捜した。

「うつ・・・どこだ！兄貴い!!!!!!」

「アツー！」

途端、俺の後方から声が聞こえてきたのだ。

「にいさん!?!」

俺は咄嗟に振り向いた。

「・・・だれ」

俺が振り向いたときに俺の後ろにいたのは、ガチムチなんかじゃない、やせ細った青年だった。

「僕だよ、さつきからアツー! って声を出してたのは」

「!?!?・・・俺が・・・俺が兄貴の声を聞き間違える筈がない!」

「聞き間違えたんだよ、あんたは。俺が出した声と・・・兄貴の声を。」

「嘘だ!嘘だ!嘘に決まってるんだ!」

そんな筈はないのだ。史上最強(自称)のニコ厨の俺が・・・!?
史上最強のニコ厨がガチムチな兄さんの声を聞き間違える事は万死

に値するのだぞ!?

「あんたが何で聞き間違えたか教えてやろうか」

「あんたらがいつも・・・いや、いつもかどうかは分らないが・・・いつも、見ているパンツレスリングの兄貴の声は機械越しなんだよ。だから頭の中にインプットされている声は機械越しの声なんだよ。それと同じようにおれはアッー!と叫んだ時に機械を通してんだ。機械を通してたつてどういう事かって?すごい商品でな、ドンキ・ホーテで買ったんだが。自分の声を隠すために機械を通して他の人の声に聞こえるものがあるんだよ。いわゆるコナンの蝶ネクタイだな。」

本日二度目の稲妻が俺の体に走った。

「・・・俺は・・・兄貴を愛していなかったのか・・・」

楓がやってきて俺の肩に手を置き

「お前、元々愛してなかっただろ」

カンカンカン!!

頭の中でボクシングの試合が終わるときのラストゴングが鳴り響いた。

「もしも、仮に愛していたとしたら、お前・・・ゲイだぞ」

カーカーカー

ゴングの音が、カラスの輪唱となり俺の頭の中に鳴り響いた。

「悪いな、俺の連れが迷惑かけちまって、ただコイツは本当にパンツレスリングがしたかっただけなんだよ。気にしないでやってくれよ。な」

楓が痛々しい物を見る目で俺を見ながらそう言った

「いや、別に迷惑とか思っていないから。俺は浜田 良介。よろしくな」

「おう、よろしく。一つ疑問に思ったんだけど。何でアッー!って

「ああ、なんか・・・表紙からして、面白そうだったから」
「そっか」

その表紙は一人の女の子があぐらをかき、手を大きく太陽に向けて開けている絵だった。

「この絵、いったいどういう意味なんだろうな」

俺は楓にそう言ったが、この輩、楓は無反応だった。

そして、コミケも終了した頃、俺達はそれぞれ帰宅した。

同人誌を買おうと行列と闘って流れた汗を流すために俺は風呂に入った。

第2話 今生きてる俺達って、昔のヤツからすれば未来人なんだよな。

(後書き

皆さん、お気づきでしょうか。この作品の主人公は、悟ではなく楓
なのですよ!!!

気付くわけないですねwww

何の説明もないし、悟視点だしw

第3話 叫ぶサンゴンの母（前書き）

次の話から、歴史編です

第3話 叫ぶサンゴンの母

「チリリリリリリ！チリリリリリリ！」
鳴り響く目覚まし時計が、俺を夢の世界から現実の世界へ引き戻した。

「……………うう……………」

「カチツ」

目覚ましを止め俺は再び布団へ入る。

「ねみい……………」

しばらく、そのまま布団の中でうずくまっていた。

時は一刻一刻と進んでゆく。

チク、タク、チク、タク……………」

時計の針がリズムカルに動く音が俺の耳に入って、俺はすこしうざったい気分になり、布団を頭まで被せた。

「うあああああああああああああああああああ……！」

突然、俺は上体を上げた。

そしてそのまま時計の方へ、ゆっくりと首を回した。

「……………え？」

普通、この状況でベタなのは時間がどんどん進んでいって、遅刻しそうになるパターンだ。

それは、普通のベタだ。

今、俺の身に起こっているのは、

なのだ

サンコンは別に良い、悪い気はしない。

しかし、叫ぶのだけは止めてもらいたい。

「さっとするうつつうつつ」

ほら、今もまだおれの頭の中でリピートされている。

そろそろこの騒音を止めさせたいので、風呂から出ようとした扉を開けたその瞬間だった。

脱衣所に、

いた。

我が母親は気付いていたのだ、俺が・・・風呂場にいると言いつことに。

通りで叫ぶだけだったんだ。

俺が家にいないというだけで、警察を呼ぼうとするこの母親が、俺が見つからないのにまともでいられるはずがない。

迂闊だった。

この先は・・・話したくはない。
本当に、話したくない。

先ほど、家から出るときも俺にしがみついていたのだ。
そのせいでかなりのタイムロスを食べた。
そのような母親の醜態。話したくない。絶対に。

ちなみに、母親は月に何度か帰ってくる程度で、すぐに仕事に行ってしまう。

何の仕事をしているかは教えてもらえないが、かなりすごいコトをしているらしい。

そして、久しぶりに帰ってきた母親は・・・たまっている「悟に会えないよー」という哀しみを一気にぶちまけるのだ。

そんな母親のせいで、俺は、今日、大寝坊した。

ちなみに、コミケに行っているので、社会人という考えは止めてもらいたい。

俺はまだ高校生だ

高校2年生。

このような話をしているうちに学校へ着いた俺は、見事に遅刻した。

「松田」「はい」「坂本」「へーい」「小港」「ほーい」

「里田」「はーい」

「桐谷」

「桐谷」

「桐谷？いないのか？」

「はあああああああああああああいいい！」

出欠席を確認している時に扉を開けそつと入ろうとしたが、もの見事に俺の名前が呼ばれたのだ。俺は返事せざるを得なかった。

そのような、みんなの視線が俺に集まっている空気の中で、授業が始まった。

一時限目 歴史

「その時だな、アメリカの領事ハリスが日本に来たんだ」

ちょうど横浜開港の所をやっていた。俺は歴史の授業を聞くよりも、先ほどまでの俺の失態を歴史から消したい気持ちだった。

「みんな覚えてるかな？ 前回少し話したが・・・」

先生と、生徒が会話しながら授業するスタイル。それが歴史の山野口先生のやり方だ。みんながたのしく授業をできるように、すこしギャグもまぜながら、授業をサクサク進めていく。この人のテクニクは尊敬に値した。だから、俺は歴史が好きだ。

歴史の授業を聞くよりも、失態を歴史から消したい、などと俺はほざいていたが、歴史は好きだ。

歴史が好きになった理由、俺の母親はただただ叫び、俺に異常な程までの愛情表現をしてくるが、いろいろと格言と呼ばれる物を残しているのだ、俺は母親の論理的で合理的な話を何回も聞かされていた、その中に歴史の話が出てきた。

母親は俺にこう問うた「悟さ、歴史って何で学ばなきゃいけないと

思う?」俺は母親のその答えがすごく心に染みだ。

「そう、ここで、日米修好通商条約が結ばれたんだ、が、しかしこの条約、日本に不利だったわけだ」

山野口先生が歴史の授業を陽気にやっている、いきなり窓際にすわっている小谷が文句を言い出した。

「先生、歴史つまんないです。授業変えて下さい」

「暗記するだけのつまんない授業、さつさと無くなっちまえばいいのに、まったく校長は何考えてんだ」

小谷の言葉で俺の怒りをゲージのMAXを越えさせるコトなど、簡単だった。

俺は、小谷に果たし状を出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3640ba/>

Future Flag

2012年1月14日23時51分発行